彦根城馬屋

はじめに

馬屋は厩とも書き、かつて馬が人や荷物を運ぶ役をしていた時代には、いまの駐車場以上に重要な施設であったと思います。馬屋には、農家や武士の馬屋、あるいは神社の神馬舎などいろいろありますが、城郭の中の馬屋は彦根城以外にはあまり残っていないと思います。

彦根駅からいろは松に沿って彦根城二の丸へ歩を進めますと、左側・中堀の水に白亜の姿をうつしているのが佐和口多聞櫓（重要文化財）と名付けられているもので、右に長くのびているのは開国記念館としてコンクリート建築で櫓を復原したものです。二の丸に入ると、左側に佐和口多聞櫓の石垣に続いてこけら葺屋根の建物が内堀に向ってのび、それはさらに左へ折曲って表門口の橋の手前まで続いています。この建物が、重要文化財に指定されている馬屋で、昔はもっと長いものだったのですが、いまは門の傍に門番部屋の一部が復原されて、そこで終っています。

（注）こけら葺は、さわらやすぎなど比較的水に強い木を、長さ30～36センチメートルに切り、厚さ3ミリメートル程の板に割って竹釘を使って屋根に葺くもので、木材の豊かな本県では社寺建築にも多く用いられて来ました。

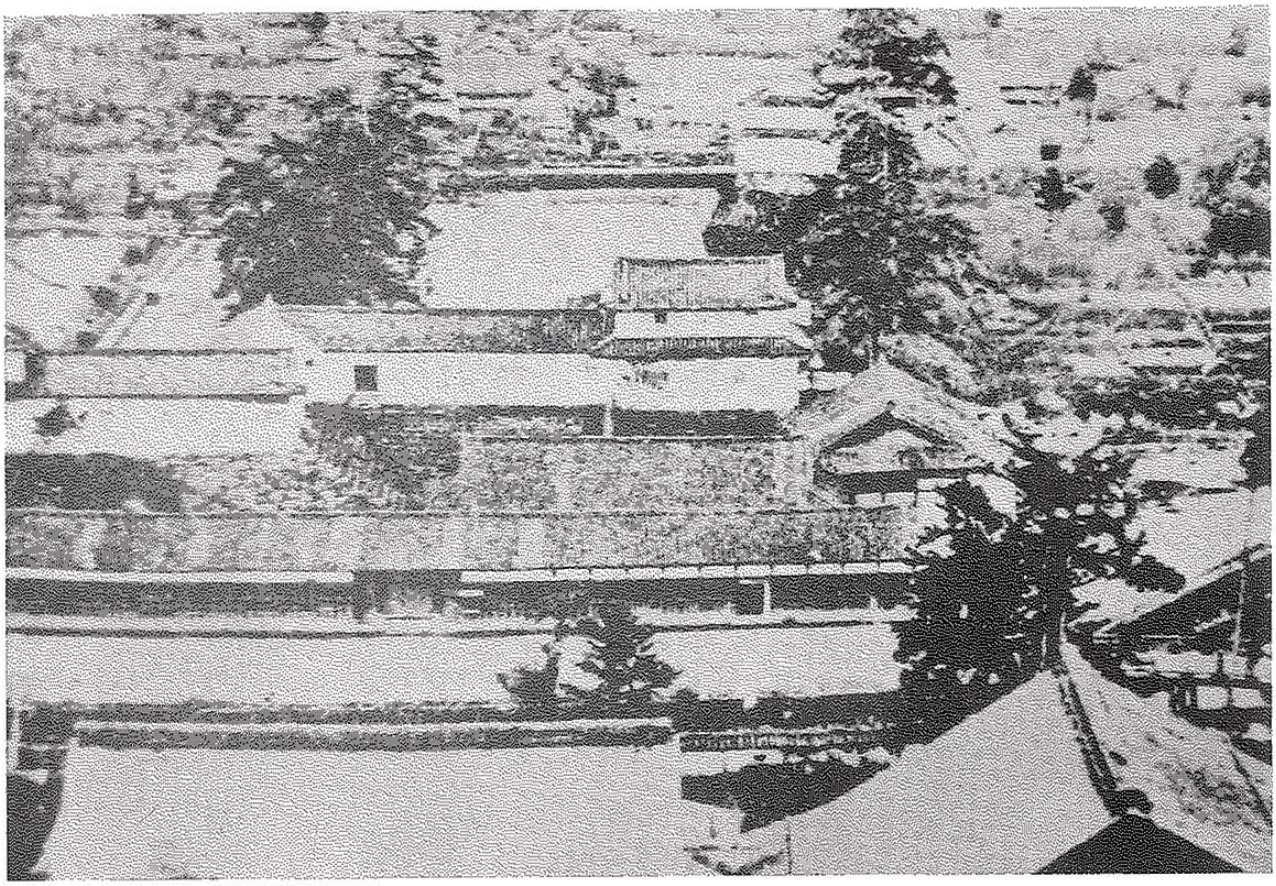
彦根城について

上野国（いまの群馬県）高崎城主であった井伊直政が、慶長5年（1600）関が原の戦功によって石田三成の居城であった佐和山城を与えられ、翌6年正月に移って来ました。しかし、その秋には早くも金亀山（いま、城のあるところ）の北の磯山に城を移す計画をたて

▲重要文化財彦根城馬屋（内堀側の全景）

51. 10. 31

財団法人　滋賀県文化財保護協会



▲明治初年二の丸の状況

ましたが、慶長７年２月直政の病没により13才の嫡男直継（後に直勝と改名）が後を継ぐことになって、移城の計画は再検討することになり、今度は金亀山に城を築くことになりました。この計画は慶長８年に伏見城で家康の許可を得て早速築城に着手し、慶長11年には天守が３階まで組みあがりました。このことは、昭和35年に実施した天守の解体修理工事で、三重の隅木（軒の角を支える木）に「此角木仕候者御与頭□川与衛門　慶長拾壱年六月二日」という墨書が発見されて、井伊家年譜の記録が裏付けられました。このように城の中心部の工事は急ピッチで進みましたが、全体が整備されたのは直継に替って藩主になった直孝の代に入り、元和８年（1622）頃であったといわれています。この二の丸の一郭もこの築城時後半になって整備されたものと思われますが、その後も建物の数は追い追い増加していったことが考えられます。

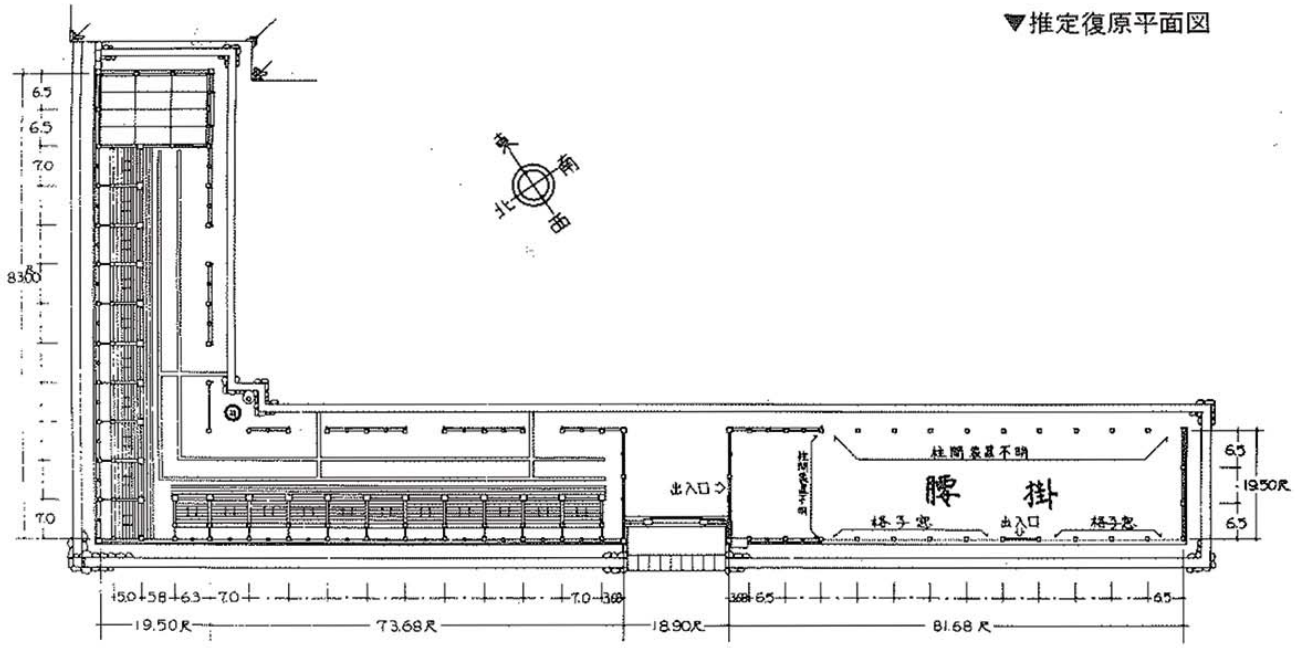
彦根城の馬屋

馬屋は、昭和41年から43年にかけて解体修理が行われましたが、この時の調査で馬屋の一部が佐和口多聞櫓の火災で類焼したことが分かりました。この櫓のことは後で少しふれることにしますが、その火災は明和４年（1767）のことで、現在の櫓は明和６年から８年にかけて再建されたものです。

馬屋は類焼部分の再建にあたって櫓寄りの平面が変わり、それまではこけら葺であった屋根も、再建部分は瓦葺とし、他の部分もこけら葺の上に瓦を葺くことになりました。このこけら板や関係部材の釘穴などから屋根替えの回数を数えてみて、この馬屋は元録年間(1688～1703）に建てられたものと推定できますが、これは絶対的ではありません。

彦根城は、明治初年の廃城命令があったとき全面的取毀しをまぬがれたものの、この馬屋は、その後長い間倉庫や住宅に使用されていたので甚だしく荒れていましたが、幸にも解体調査によって創建当時の形式が殆ど明らかになり、多聞櫓寄りの馬番部屋、馬つなぎ場および門番部屋の一部が復原され、屋根も

▼推定復原平面図



全部こけら葺になって、昔の馬屋の様子を現実に見ることができるようになりました。

はじめの方で、この建物は現状よりもっと長いものだったといいましたが、これについては2ページの明治初年の写真でわかるように、馬屋の外観を見ると、現在なくなっている部分は外側（道路に面した側）がすべて格子窓になっており、古図にはこの部分に腰掛と記されてあります。この写真から判断できる程度の平面図を掲げましたので参考にしてください。

彦根山由来記に「同所御建物御馬屋腰掛共三間梁、卅八間之内、十七匹立御馬屋」とあるのがこの建物を指していると思われ、なお大正14年発行の「彦根城頭より俯瞰すれば」と題する小冊子には「昔は、館に出仕した家中の諸士の供の若党や仲間などが、此の供侍腰懸に腰を下して主人の退出を今か今かと待っていたのだ。」と表現しています。

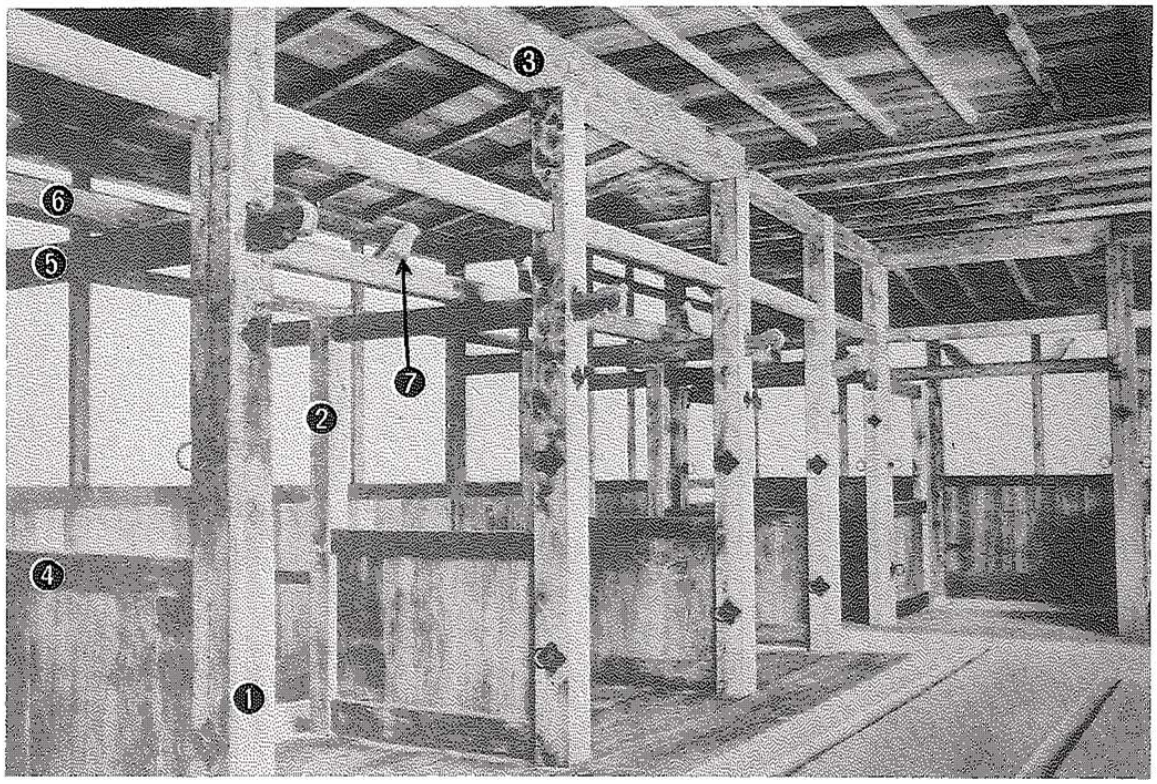
復原に当っての地下調査によって、櫓寄りの馬つなぎ場の平面が明らかになり、床の構造も分かって、21頭を収容する馬屋が復原できました。馬つなぎ柱(写真参照)は約21センチメートル角で地中へ 1.2メートルほど掘っ建になり、その後ろの押柱も1メートルほど地中へ入っているので、馬が少々あばれても大丈夫だったでしょう。ただし先年の解体修理工事では、うち4本の柱だけを掘っ建にし、その他は地表に礎石を置いてその上に建てることにしました。猿肩貫の上の腹掛桁には1頭分ごとに猿耳が2個ずつついていて、昔の馬屋の絵をみるとここに腹帯を搦んでいます。この馬屋には、猿耳の現物が残っていなかったので、復原に際しては京都・清水寺馬駐（重要文化財）のものを参考にして作りました。

馬つなぎ場は、地表に転根太を並べた上に厚い板を張り、後ろ寄りに上げ蓋をつくってその下に口径30センチメートルほどの小便壺を埋めています。L字形平面の隅部には井戸があり、広い土間には溝を作って、馬の世話や掃除などに使用した水が外の溝へ流れるようになっています。なお、古図によると、二の丸の一郭にはこの馬屋のほかに御客馬屋があり、彦根山由来記にも御成馬屋五間に十間と記してあります。

佐和口多聞櫓

この櫓は開国記念館寄りで切断された形になっていますが、もとは櫓門によって開国記念館になっている櫓と続いていたもので、現在、道路面には櫓門の礎石が残っています。

彦根市内の旧家に「年代記」および「御作



▲彦根城馬屋内部

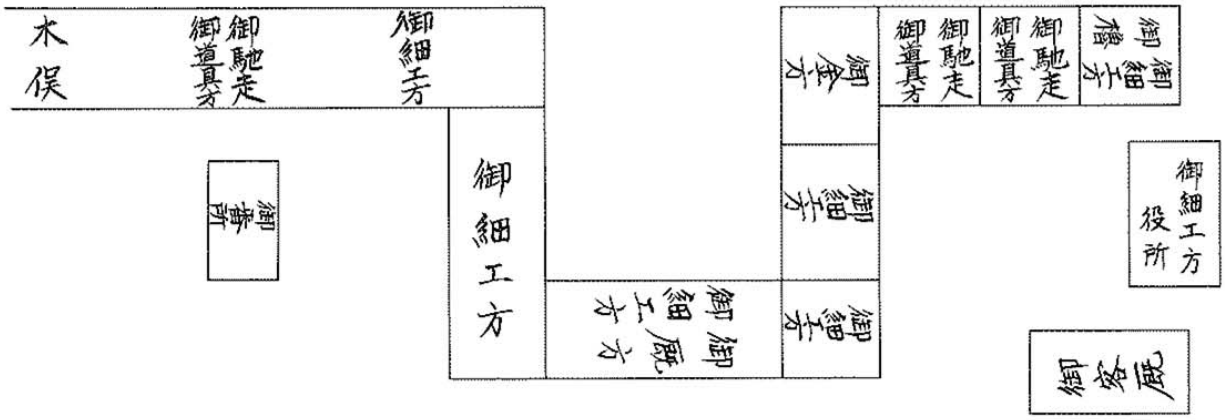
事方肝煎勤向帳」と題する二冊の古文書が伝わっており、年代記の明和４年の項に「彦根二之曲輪御細工櫓より出火六月十日」とあり、勤向帳は表紙に「天保二年卯八月」と記されてありますから明和４年より64年後のものですが、その中に記された平面図には、挿図に示すように御客厩、御細工方役所の建物があり、多聞櫓の中は部屋ごとに御細工方御櫓、御馳走御道具方、御金方、御細工方、御厩方などの名称が記されてあります。

解体修理工事によって、これらの建物内部の名称や出火の記録が裏付けされました。また櫓の再建に際しては、平面が変更され、特に防火について留意されたことが分かりました。それは、この櫓は内部の間仕切のうち２か所が防火間仕切りになっていて、その位置では床組や屋根の木構造が切離されて土塗りのみで接続し、防火戸を建てるという工夫がなされてあったことです。

おわりに

以上、佐和口多聞櫓にもふれながら馬屋の概要を記した訳ですが、狭い道路に自動車がひしめいているいまの時代に、彦根城の中で小半時江戸時代の生活に思いをめぐらすのも心の糧となることと思います。

（成瀬弘明氏提供）



御作事方肝煎勤向帳に記載の二の丸建物配置図